

ЕСЛИ ЗВЕЗДЫ ЗАЖИГАЮТ… もしも 星たちが 点るなら・・・

Kultura.az Проф. Рахман БАДАЛОВ クリトゥラ.アズ：ラフマン・バダーロフ教授



「お聴きよ」、と詩人は言いました。「もしも星たちが点るとしたら、それは誰かに必要だからじゃないか？つまり、誰かが星たちについてほしいからじゃないか？」。

2012年6月2日、私たちのバレエ・オペラ劇場の舞台に星が点った。せめて年に一度でも、普通の子どもたちのためにも、障害を持つ子どもたちのためにも、これらの星たちを点さねばならない、とわかっていた人間がいたのだ。私たちは、慌しい日常の中で、耳がよく聞こえない、または目が見えないとか、外見や行動で他と違う子どもたちが自分たちのすぐそばで生活していることに注意をはらわない。

聴いてください、と詩人のことばを借りて言いたくなる。もしも2012年の6月2日に、私たちのオペラ・バレエ劇場の舞台で、星（スター）たちが輝いたとしたら、それはつまり、誰かがそれを望んだからだろう。誰かが、せめて年に一回（こどもの日に）、この星たちを、普通の子どもたちと、障害を持つ子どもたちのために点すことが必要だ、ということがわかっていたのだ。私たちは、ふだん、自分の良心が痛まないように、見聞きしたり関わりを持ったりしないように、この子どもたちをゲッターに追い込んでいるかのようだ。「聴いてください」、と普通と違う子どもたちを助けている人々は言った、「私たちはこうすることで、自分の子どもたちがより人間らしくなり、敏感になり、大人になるのを助けているのです。そして、子どもたちを助けることで、私たち自身がより善良に、人間らしくなれるのです」。私たちは皆、善良さとまごころを失くしつつあり、そのことがどんな悲惨な結果をもたらすか、わかっているのです。そうならないためには、もしかしたら、障害を持つ子どもたちへの関わりから始めるのがふさわしいのかもしれない。

しかし、全体について順を追ってお話しするでしょう。

一年以上前に、ザーラ・イマーエワは、普通の子どもたちと障害を持つ子どもたちが一緒に参加する“イベント”を思いついた。こうした場合いつもそうであるように、財政的基盤（今時のことばで言うと、ファンドライジング）の問題が起きた。財政的基盤なしにこうしたイベントを実現するのは不可能だ。長いこと探した後、ソロス財団として知られている、アゼルバイジャンの《開かれた社会》研究所の関心を引くことができ、同財団がこのプロジェクトを援助することとなった。こ

の頃ソロス財団はアゼルバイジャンでの活動を終えつつあったので、いわば、象徴的に、このイベントは同財団の、最後の成功したプロジェクトの一つとなったのだ。

このイベントで、ザーラは2つの、どちらも同じくらい困難な課題を解決せねばならなかった。

その第一は、ザーラが長年一緒に活動してきた、その大部分が舞台と観客に慣れている、アートセラピーセンター《Didi》の子どもたちの集団に、身体障害を持つ子どもたちを加える、ということだった。

実を言うと、私は最初からザーラに対して、イベントに加わる子どもの数を絞ることを勧めていた。ボランティアはボランティアとして、このプロジェクトに多大な貢献をしてくれたが、ザーラは、実質的にあらゆる仕事を自分でやり遂げねばならなかった。しかし、こうした子どもたちとの活動に要する大きな精神的負担、という心理的な困難以外にも、多くの組織上の困難があった。大抵の場合、病的なまでに他からの《干渉》に反応する指導者たちと話し合わねばならず、街の中心から遠くにある寄宿舎を、しょっちゅう車で訪れねばならず、個々のグループと別々に練習し、公演直前には子どもたち全員と一緒に合同リハーサルを行わねばならなかった。時々私には、何もものにならないのではないかと、これは物理的に1人の人間には手に負えないのではないかと、思われた。恒常的な交通手段がないこと、リハーサルに必要な部屋がないこと、限られた財政的可能性、その他諸々については、言うまでもない。

ザーラは私の提案を、まったく受け入れがたいものとみなした。うまく行くか行かないか、物理的エネルギーが足りるかどうかなど、問題ではない。彼女は、このプロジェクトに引き込まれたどの子どもも、《イベント》の外側に取り残すことなどできなかったのだ。サン・テグジュペリの作品の有名な一節、《わたしたちは、自分たちがなじみになったものに対して責任がある》を覚えておられるだろうか？そして今回は、当たり前の子どもの時代を得られなかった子どもたちが問題なのだから、私たちの責任は100倍も大きいのである。

今では私にも、ザーラ・イマーエワが正しかったことがわかる。この子たちのうちの1人たりとも拒否することはできなかった、全員がこのプロジェクトに参加しなくてはならなかったのだ。しかし、今では他のことも同様にはっきりとわかっている。我々の大部分は、何千という、完全に説得力ある、合理的な言い訳を見つけただろう。曰く、《どうして私が他の誰よりも努力しなくてはいけないんだ?!》、《それなら誰かが私の問題を考えてくれると言うのか?!》、《国があるじゃないか、国がこの子どもたちの面倒を見るべきだ、私には自分の問題だけで沢山ではないか?!》。こうした救いとなる《口実》を、賢いヘーゲルはかつて《意識の陥穽》と名づけた。ザーラは言い訳を考え付こうとはしなかった。自己弁護の方便を探そうとしなかった。ただ、この瞬間、自分のことを、疲労について、健康について、お金のことなどなどを考えるのをやめたのだ。このイベントには出来る限り多くの子どもたちが参加しなくてはならない、それは彼女にとって主要な、唯一可能な論拠だった。はっきりとお世辞抜きに言うが、これこそが、私がザーラ・イマーエワの勇気に感嘆する理由である。

こうして、プロジェクトには《ジェジエリエル(“腕白者”という意味のアゼルバイジャン語)》グループのメンバーであるダウン症の子どもたちが現れた。ろうあや弱視の子どもたちも現れた。彼らはみな、最初は自分たちのグループでリハーサルし、それから全員が一緒になった。私は今もって、この最初の合同リハーサルに参加しなかったことを悔やんでいるのだが、多くの健康な子どもたちは、障害を持つ子どもたちと接触するのが初めてで、リハーサルの後で、この子どもたちがどんな暮らしをしているのか、誰が彼らを助けているのか、どうやって勉強しているのか、などと大人たちを質問攻めにした。

このイベントの結果、オペラ・バレエ劇場の舞台には、4歳から68歳までの127(!)人が出演した。これは、想像することさえ難しい快挙だ。

次に、ザーラ・イマーエフが同様に並々ならぬ努力を強いられた、二番目の困難について述べよう。私も部分的には知っており、想像のつくことだが、不眠の夜々、いくつもの疑念があり、この疑念は、すべてが終わり、ホール中の観客が、単に思いがけない見世物に対してだけでなく、自分たちが味わった、とてつもない感動に対し、一斉に拍手を送った時まで、ザーラから離れなかった。

ザーラ・イマーエフは、自分のイベントを、アゼルバイジャンの伝統的独唱、ムガムの即興演奏と、舞踏的パントマイム、音楽的・詩的インスタレーションを伴う、《アプシェロンの伝説》として構想した。このアイデアの中には多くのものが交錯していた。街(バクー)への愛情、広い意味では、彼女が12年以上暮らしている半島への愛情、それは、異人(よそ者)が通俗的な観念と旅行者の紋切り型の感想を踏み越えたところにのみ鋭く感じられるものである。それゆえに、敬虔なイスラム教徒であるザーラにとって、アプシェロンはかつて数千年以上前に偉大なスーフィー詩人、ババ・クーヒ・バクーヴィが住んでいた場所であり、その詩句、《私は消えた、私は非存在に溶け込んだ、宇宙のいれものとなり、私はただ神のみを見ていた》を彼女は何度でも繰り返すだろう。そしてまた、500年以上前に生きていた、もう1人のスーフィーの哲学者にして思想家、セイード・イアヒア・バクーヴィの住んでいた場所でもあった。彼の廟は、シルヴァンシャフ宮殿の中にあつて、《ジェルヴィーシャ》の廟として有名である(註参照)。そして、彼女は夢で見たのか、それとも幻視だったのかはわからないが、運命が彼女を偶然ではなく投げ出した、この地理的ではなく、霊的な場所についての《伝説》を創作しなくてはならない、と確信したのだった。そして他にも合理的な説明の枠には収まりきらない、多くの理由があった。

正直のところ、私は、神秘主義からはほど遠い、合理的で疑い深い人間なので、ザーラが受けとめている現実に従って考え、感じようとはしていない。そして**アプシェロン**に対しては、別の見方をしている(私の見解では、^{ノンコンフォルミスト}非構成主義者である、我らの偉大なアプシェロンの画家たちがキャンバスに描いたアプシェロンは、自然界にはもう存在しない)。現代のバクー住民に関しては、(彼らには両方の**バクヴィ**とも共通点があり、大きなメガロポリスでの都市集中化した生活様式を十分認識している)と見ており、天地創造の神話に対しては、(ステロタイプを避けるためにその始原性へと突き進むのは、事実上、不可能だ)とみなしている。しかし、ザーラ・イマーエフとの長年の交流の後で、私に中で他のものの見方も強まった。「異人」は、自分の考えや感情を他人に押

し付けない（これは、必須条件だが）だけでなく、その「奇行」がお互いの微笑を誘っている限り、その異質性によって喜びをもたらすことさえできるのだ。

『アプシエロンの伝説』は、イベントの中で、アプシエロンにおける生命の誕生に関する、天地創造の神話として描かれている。すべては、文字通り、私たちの目の前で起る。まず、世界は声を獲得し、その後、風、雨、海が現れ、そして、ついに、人々の都市が出現する。これらすべてが、大きなガバリというタンバリン、雨を象徴する銀色のリボン、内部から光を放つざくろ石、タールという大きく透明な、原始的で親しみのある響きをかもし出す弦楽器など（イベントの創造者が持っていた極めて小さい可能性の中で）、非常に変幻自在で、可視的だ。

イベントのすべての参加者、健常児、障害児、大人、両親、心理学者、ろうあ教育者、その他すべての参加者が、イスラムの托鉢僧の衣に身を包み、仮面をつけていた。イベントの目玉は、まさに、ここにあるのかもしれない。第一に、僧衣は時間的にも空間的にも、一切捉われない、永遠の放浪者のシンボルである。第二に仮面は、単に、カーニバルの雰囲気をかもし出したばかりでなく、このイベントの範囲内で意図的にあらゆる違いを隠し、健常児や障害児などすべての子どもたちを均等化した。そして、仮面が外されて初めて、我々は、踊りのパントマイムのなかに、健常児も、普通の子どもたちと違っている子も、彼らを教えている心理学者も、耳の不自由な子どもたちと“話す人”たちの世界との交流を助けているろうあ教育者たちも一緒にいて、同等に参加していたことが分かったのだ。そして、第三に、特に注意を喚起したいのだが、教師と両親、子どもたち自身の、この共同パフォーマンス（これは、ザーラ・イマーエフの一種のノウハウだが）には、治療法と表現しうる多大な教育的ポテンシャルが含まれている。退屈で、ゲームの要素が欠け、教える人と教えられる人との間に、越え難い溝がある教授法は、効果が薄い。その点、このイベントは、“教授法なき教授法”と呼べ、同時にそれは、カーニバルであり、効果的な教育メソッドでもあった。

我らが偉大な歌手、アリム・ガシモフが、娘のフェルガナと孫のゴヴハルと共に出演してくれたことは、イベントのクライマックスとなった。ザーラはイベントのことを思いついた当初から、これには、アリム・ガシモフの参加は不可欠だとみなしていたが、この時も、いつもの通り、私は懐疑的だった。ガシモフは仕事を山ほど抱え、過密スケジュールで何年も先まで予定が埋まっており、それに、我々一般人には手の届かない存在のように思えたからだ。さいわい、その心配は無用だった。アリム・ガシモフは、過密スケジュールを縫って参加することに、喜んで同意してくれたのだ。しかも、イベントに満ち溢れるヒューマニズムをすぐに理解し、一人だけでなく、娘や孫と共演してくれることになったのだ。これで、ザーラは、多くの信じがたいほどの困難にもかかわらず、イベントの最終的成功を保証するために星（スター）たちが自然に集まってくれた、と言えるようになった。

明るい調子でこの文章を締めくくりたいところだが、新たな不安、新たな疑心暗鬼から逃れるのは困難だ。この後はどうなるのだろうか？自分たちの“ゲッター”の境界を破り、お祭りをプレゼント

された子どもたちは、これからどうなるのだろう？ ザーラ・イマーエワと、私たちの街で実現した、彼女のあの大きな創造力はどうなるのだろう？ 一晩の間、自分のよろいを脱ぎ、これまで、その存在そのものを考えないようにしていた子どもたちに共感することが出来た私たち皆は、どうなるのだろう？



トグルール・ジュワルリは、そのサイト“コンタクト a z”に、意味深長に“愛と喜びの出会い”と題した印象的な記事を載せ、その中でこのような催しを伝統的なものにし、それを毎年6月1, 2の両日、あるいは、新学期（9月1日）の前に催すことを提案している。そして、その実現のために、ザーラ・イマーエワが、そのとき、アゼルバイジャンに居るか、国外かを問わず、どこに住んでいようと彼女を招待することを提案している。

私はジュワルリ氏の提案を100%支持し、自分の力と可能性が許す限り参加する用意がある。だが、手始めに、まず、新学期を前に、この行動を繰り返し、イベントが恒常化するよう、可能性の限られた私たち子どもたちが、アゼルバイジャンのような豊かな国の中で自分たちが“ゲッター”にいるかのように感じないで済むように、サポートしてくれる人々をこのイベントに招かなければならない。

私は、このような人は、バクーにいると確信している。ただ、その内の多くの人は、2012年の6月2日に、私たちのオペラ・バレエ劇場の舞台で何が起こったかを知らなかったし、今も知らないままだ。

註) セイド・イヤヒヤ・バクヴィ廟 —— 1457-1463年頃、バクーに建造。シルヴァン
シャホフ宮殿の中庭の中央にある。一般には“ジェルヴィーシャ”廟として知られるが、そこに埋葬
された哲学者=思想家である、バクヴィの名が付けられている。

筆者のラフマン・バダーロフ教授は、現代アゼルバイジャンを代表する文化学者、文明批評家で、
ザーラ・イマーエフの活動を支えている有力知識人たちの一人である。

出典： 2012.06.14.

http://kultura.az/articles.php?item_id=20120614074516556&sec_id=20&lang=ru

翻訳： 村山敦子